

柴田夫妻コレクションにみる銘款集成 4

— 18世紀後半から近代まで —

宮木貴史

1. はじめに

肥前磁器の裏には、「大明成化年製」や「福」などの文字や、草花文や虫などのマークのようなものが染付や色絵で描かれていることがあり、銘や銘款、底裏銘などと呼ばれている。肥前磁器では磁器創始段階から中国磁器を意識した製品作りを行っており、高台内の銘も中国磁器の影響を受けて書き入れられている。中国磁器の銘を模倣したもの、そこから転化したもの、肥前磁器独自に創出したものなど、多種多様な銘をみることができる。

佐賀県立九州陶磁文化館が所蔵する柴田夫妻コレクションは肥前磁器を中心とした一大コレクションである。全体で4,332件10,311点を数え、体系的な収集によって、江戸時代から幕末明治にかけての肥前磁器の変遷をみることができる。4,332件のうち1,812件に銘が施されており、筆者は江戸時代から近代までの肥前磁器銘の基礎資料とするために、このコレクションにみられる銘を集成、分類を行ってきた（宮木2021、2022、2023）。なお、年代などの資料の基本データは大橋康二氏が報告した、『柴田夫妻コレクション総目録（増補改訂）』（九陶2019）を参照する。

磁器創始後、銘を施すようになってから本格的な海外輸出を迎える時代、柿右衛門様式が確立し海外輸出の最盛期を迎える時代、画一化が進み海外向けから国内向けへとシフトしていく時代に分けて集成と分類を進めてきた。柴田夫妻コレクションでは17世紀後半から18世紀前半の資料が多く、その後の時代は資料の数的には減少する。そのため本稿では、18世紀後半から近代までの肥前磁器をまとめて扱うこととし、対象範囲1,048件のうち銘のある397件について、銘の集成と分類を行う。なお、産地や時代に疑問が残る資料については除外している。

2. 銘の分類

肥前磁器の高台内に記される銘を大きく7つに分類し細分類を行う。すなわち、(A) 中国の国・年号及びその転化、(B) 吉祥語、(C) 合字・異体字・不明字、(D) 昆虫や草花などのマーク、(E) 生産地・生産者を表したもの、(F) 和暦、(G) その他、である。以下、分類ごとに年代順で紹介するが、細分類の数字はこれまでの論考からの通し番号を付している。なお、文末の（）内は該当する作品の図版番号であり、図版として「柴田夫妻コレクション肥前磁器銘一覧④」を付した。

A : 中国の国・年号及びその転化

A 3 :「大明成化年製」 中国磁器銘に倣ったもので、江戸時代を通じて使用された。中国の明王朝の年号「成化」(1465 ~ 1487 年)を表す。1630 年代から途切れることなく、一定数の使用を保ちながら近代まで使用される。「大」と「太」の表記ゆれも近代まである。当初は単純な誤用と思われるが、スイス・アリアナ美術館の所蔵品には「大明嘉靖年製」に赤字で点を加えたものがあり、意図して変えた可能性が指摘されている(大橋 2022)。337 は 5 点揃いの皿だが、「大」と「太」どちらも有り、表の文様含め書き方に差がみられる。(004、010 他)

A 4 :「明」 中国明王朝の国号を表したものだが、「大明成化年製」などから一文字抜き出して使用したものと考えられる。今回の対象範囲内では 197 の 1 例のみであり、柴田夫妻コレクション内でも他に 1640 年代の事例が 1 例のみ確認される。事例数としては少ないものの 100 年以上後になって再び使用された銘と言える。

A 6 :「大明嘉靖年製」 中国明王朝の「嘉靖」(1522 ~ 1566 年)を表すものだが、223 の 1 例のみ。1650 年代に出現し、18 世紀前半にかけて数を増やすものの 18 世紀半ばに断絶する。

A 8 :「大明成化年造」「大明成化年製」の「製」が「造」となったものだが、中国磁器に事例があるためそれを模倣した銘である。柴田夫妻コレクション内では他に 1650 ~ 1660 年代の事例が 1 例あるため、A 4 や A 6 のように空白期間を置いて再使用された銘と言える。(330)

A10 :「宣徳年製」 中国明王朝の「宣徳」(1426 ~ 1435 年)を表し、肥前磁器では 17 世紀後半を代表する長吉谷窯跡、柿右衛門窯跡などにみられた銘だが、18 世紀前半では姿を消していった。A10 は角柱を伴わないが、二重の角柱を伴うものを A33 として後述する。(099、232)

A17 :「大明年製」 中国明王朝を表す年号銘。18 世紀前半では特に手塙皿に多かった。18 世紀後半以降では小皿など小品に多いものの、手塙皿への使用例は 1 例に留まる。(029A、030 他)

A24 :「大明萬曆年製」 中国明王朝の「萬曆」(1573 ~ 1619 年)を表す。18 世紀前半の元禄様式を代表するような銘であったが、18 世紀後半以降では 3 例のみ。(101A、105 他)

A30 :「成化年製」 中国明王朝の「成化」を表すものだが、肥前磁器では 18 世紀になって出てくる銘である。18 世紀後半以降はさらに使用例が増える。(007、014 他)

A31 :「大清雍正年製」 中国清王朝の「雍正」(1723 ~ 1735)を表す。中国磁器に倣った銘である。当館の所蔵品でも、他に柴澤コレクションに 1 例(収蔵番号 14411)あるのみで、派生した銘も多い「乾隆」銘に比べるとかなり少ない。(081)

A32 :「隆」 中国清王朝の「乾隆」(1736 ~ 1795)を表す「大清乾隆年製」の篆書体銘から「隆」のみ抜き出したもの。角柱があるものとないものがみられる。(153、157 他)

A33 :「宣徳年製(二重角柱)」 二重角柱を伴う銘であり、1800 年代前後に特徴的なものである。年号銘を二重角柱内に入れた形態は明代から清代の中国磁器にあるが、肥前磁器では少ない。

長吉谷窯跡の例に「示+大明」のものがあるが、特殊な事例であろう。(168、194 他)

A34 : 「大清乾隆年製」 中国清王朝の「乾隆」を表す篆書体で書かれた6文字の年号銘で、中国磁器に倣って使用している。(203、219 他)

A35 : 「清」「清」の篆書体銘。おそらく同時期にみられる「大清乾隆年製」の篆書体銘から抜き出したものとみられる。(216、248 他)

A36 : 「嘉製年製」 おそらく「嘉靖年製」から「靖」が「製」になったもの。嘉靖年製銘は、A6同様に18世紀前半まで使用された。それが18世紀末に再使用された際に、変化したものか。(226)

A37 : 「乾隆年製」 中国清王朝の「乾隆」を表す篆書体の4文字銘である。(247、316 他)

A38 : 「乾」「大清乾隆年製」の篆書体銘から「乾」のみ抜き出したもの。「乾隆」の派生銘の中で特に多く、器種問わず使用される。大皿も多いが、対して小品には少ない。(255、272 他)

A39 : 「大清年製」 中国清王朝を表した篆書体銘で、清朝磁器に本歌がある。(256)

A40 : 「大明年造」 中国明王朝を表す銘だが、一般的な「大明年製」の「製」が「造」になったもの。中国では明王朝時代の民窯製品で使用され、日本でも「大明年造」銘の中国磁器は全国的に出土例がある。ただし、肥前磁器には少ない。(281)

A41 : 「永樂年製」 中国明王朝の「永樂」(1403～1424)を表す年号銘。中国磁器では、永樂年間に2行6文字の年号銘はなく、「大明○○年製」の形態は宣徳年間から始まる。(309)

A42 : 「大清乾隆」 中国清王朝の「乾隆」を表す篆書体で書かれた4文字の年号銘だが、6文字銘から「年製」を省略している。(344、367)

B : 吉祥語

B 1 : 「福」 福字銘は肥前磁器銘の中でもA3「大明成化年製」系の銘とともに早くから現れ、江戸時代を通じて使用される。ただしA3とは違い、示偏に「畠」を旁としたB1は17世紀末以降数を減らし、B6「福(渦福)」などの別形態の福字銘が流行してきた。18世紀後半は後述するB18やB24の出現もあってか特に少なかったものの、19世紀以降に再び使用される。(289、349 他)

B 2 : 「福(草書)」「福」の草書体銘。1例のみで二重角枠を伴うが、渦福の崩れとは形態が異なるためB2とした。(317)

B 4 : 「壽」 吉祥の文字として銘に描く。(094)

B 6 : 「福(渦福)」 二重角枠に入り、「田」の部分を渦状に描くいわゆる「渦福」銘である。1670年代以降から18世紀前半にかけて「福」字銘の主流となっていた。延宝様式の時代に確立した渦三重のものを典型とし、18世紀に流行しながら崩れていく。18世紀末になると使用

されなくなり、19世紀前半にはみられない。明治以降に再び典型的な形の銘が使用されるようになる。(002、005 他)

B 8 :「富貴長春」 中国磁器にもある吉祥の文句。18世紀前半では B 6 に次いで多かったが、18世紀後半では B 類の中で最も多くなる。(001、006 他)

B 9 :「奇玉宝鼎之珍」 器を賛辞する吉祥の文句。貴重な玉、宝のような鼎のように珍しい良い物であるという意味か。元禄様式の時代に特徴的な銘で18世紀中頃まで引き続き使用されたが、後半には数を減らし19世紀前後に再び使用される。(003、042 他)

B15 :「長命富貴」 中国磁器に多い吉祥の文句。長寿や富を祈念する意味か。188A の一例のみだが、A 6 や A22 のように18世紀末に再使用された事例か。

B18 :「福(示+米)」「富」が省略されて「米」の篆書体のようになった銘である。中国では明朝磁器にこの形態の福がみられるため、これに倣ったものと考えられる。(038、072 他)

B19 :「福(山に渦)」 山の下に渦を表現したもので、B 6 からの派生銘と考えられる。18世紀後半に使用されるが、B 6 同様に18世紀末には使用されなくなる。(048B、066A 他)

B20 :「富」「富」を篆書体にした銘。「富貴長春」などに同様の書体の銘がある。(086)

B21 :「大明富貴長春」「富貴長春」の頭に「大明」が付いた珍しい銘。(101B)

B22 :「羊友珍玩」 器を賛美する銘の一種だが、おそらく中国磁器にある「益友珍玩」からの転化銘と考えられる。(132)

B23 :「竹友珍玩」 B22 と同様、直接の本歌はなく「益友珍玩」からの転化銘か。(133)

B24 :「福(示+×)」 示偏の上に「一」が付き、旁の上部に「×」を配して下部の「田」も「×」になった特徴的な福字銘。A33 とほぼ同時期に使用される。(150、158 他)

B25 :「永楽宝製」「永楽」は中国明王朝の年号にあり「永楽年製」からの転化も考えられるが、明確に「宝」の文字が書き表されているため B 類とした。(234)

B26 :「長生未央(瓦当文様)」 二重の円内に十字を書き、区画された四方に吉祥句が配された銘で、中国漢時代の瓦当文様が表されたものである。(260)

B27 :「元」 おそらく「玩」の「元」の部分が抜き出されたもの。(284)

B28 :「玩」「○○珍玩」や「玩玉」などの銘から「玩」だけを抜いたもの。(285、286 他)

C : 合字・異体字・不明字

C 1 :「示+朱」「朱」と「示」の篆書体を組み合わせと考えられ、偏と旁が逆のものもある。1680年代まで一度で消えたものが、19世紀になって再使用された。(295、327)

C60 :「不明字 46」 枠内を中央で縦に区切り、左には縦線を2本、右には人のような線を入れ、そこに横線が10本弱入るが、上から5本程度は真ん中で途切れている。この格子目状の印

形銘は似たものが中国磁器にもあり、富永樹之氏はこれを「富貴佳器」銘が形骸化したものと推定している（富永 1998）。（027、045 他）

C62:「不明字 48」 角枠内に直線が 2 本ないし 3 本、縦横に組み合わされて網代文のようになっている。おそらく「福」が崩れたものだろう。（018）

C63:「不明字 49」 二重角枠に木の篆書体のような字と原形不明の字を合わせたもの。（044）

C64:「不明字 50」 二重角枠を中央で縦に区切り、左に「春一」と読める文字を配し、右は縦 2 本、横 5 本程度の直線が交差している。C60 と似ているが関係は不明。ただし、C60 が 18 世紀半ばで姿を消すのに対し、C64 は 18 世紀後半に多い。（046、053 他）

C65:「不明字 51」 「土」や「山」の下に几（かぜかんむり）の文字が入り、「嵐」のようにもみえるが、おそらく「壽」字の一種であろう。（060、116 他）

C66:「不明字 52」 原形不明。何かしらの文字の組み合わせから変化したものか（071）

C67:「青カ」 角枠に横線 3 本、縦線 1 本を入れ、横線の下部が「巾」のようになっている銘。18 世紀後半から 19 世紀にかけてみられる。（109、146 他）

C68:「不明字 53」 二重角枠を中央で区切り左に「朱」の篆書体のような字を入れ、右は格子目状だが、横線は続けて書かれており雑な表現となっている。（122）

C69:「不明字 54」 縦長の二重角枠内に横線や「工」、「示」などが組み合わされたもの。中国漳州窯系のいわゆる印判手皿の文様を原形とするのではないかと考えている。（154）

C70:「不明字 55」 二重角枠内に木の篆書体のような字と戸（かばね）の文字が入ったもの。C73 に近いため、「梶」の異体字かもしれない。（175）

C71:「不明字 56」 一見すると C49（礪）のようにみえる銘である。C49 と比べると右上が「古」ではなく「土」であったり、特徴的な U 字の表現がなかつたりする。（176）

C72:「不明字 57」 二重角枠内に「春」のような字と、「串」や「車」のような字が入る。C64 などの表現に近いので、一連の銘か。（189）

C73:「梶カ」 二重角枠内に「梶」の篆書体と思われる文字が入る。（195、259 他）

C74:「不明字 58」 くずし字のような文字で、5 点揃いの内、1 点にだけこの銘がある。（206）

C75:「不明字 59」 二重角枠内に波のような表現と、「春」から「日」を除いたような文字が入る銘で、C72 同様、C64 などに連なる銘と考えられる。（221）

C76:「不明字 60」 原形不明の印象形文字。三文字で構成されており、右下は「福」のようにもみえるが他はわからない。（236）

C77:「不明字 61」 二重角枠に示偏と「豆」のような文字が入る銘。おそらく「福」の省略銘だと考えられる。（238）

C78:「山に土カ」 山の下に土を書いたとみられる銘。山形の部分に実は傷があり、この銘自

体は傷隠しとして書かれたものであろう。山形の下に一文字入れる形態は、窯道具などに刻まれた所有者印にみられる。ただ下白川窯跡の出土例には山形に上と書いた銘がある。(249)

C79:「禄カ」 二重角枠に「禄」の篆書体とみられる文字が入った銘。禄は天からの恵みを表す吉祥の文字である。(308)

C80:「吉カ」 二重角枠に「吉」とみられる文字が入った銘。中国磁器でも肥前磁器でも吉字銘は多くない。(328)

C81:「不明字 62」 二重角枠内の左側に横線とその下に「木」の篆書体が、右側に「7」のような文字が入る銘。「利」や「和」の篆書体ではないかと考えられる。(339、386 他)

C82:「不明字 63」 角枠内に縦線 1 本、横線が 4 本入った銘。C60 のより簡略化されたものともみえるが、揃いの他の皿には C67 (青カ) が書かれており、その粗雑化したものか。(374B)

C83:「不明字 64」 原形不明の銘。本来の篆書体から簡略化されたものだろう。(382)

C84:「不明字 65」 二重角枠に「岩」のような文字が入る。『日本古陶銘款集 九州編』(陶器全集刊行会 1937) で有田町上幸平の岩松平吾の銘として紹介されているものに近い。柴田夫妻コレクションの例はいずれも同意匠の皿と碗である。(391、395 他)

C85:「火 + 木」 「火」を偏に、「木」の篆書体を旁に入れたもの。多くはないが 19 世紀の資料に目立つ。偏と旁を逆にした「秋」の可能性を挙げておく。(334)

D: 昆虫や草花などのマーク

D10:「虫」 羽や触覚のような部位から虫に見える銘である。個別には触覚や足のような部分に違いがあったり、虫の上に B19 のような山の表現があつたりと細かな差がみられる。18 世紀後半に特徴的な銘で、このマークは見込み文様としてもよく使われる。(054、076 他)

D11:「宝 (必定如意)」 筆、銀錠、如意を組み合わせた宝文様の一つ。「筆」は「必」と、「錠」は「定」と音が同じで、如意は自分の思うままになることを意味しており、これらを合わせた「必定如意」とは、必ず思い通りにいくという意味の吉祥文様となる。(171、179)

D12:「盤長」 仏教に基づく吉祥文様。結び目のない様で、仏説が循環して続いていくことを表している。(354、355)

D13:「半菊葉文」 半菊を中心に茎や葉の表現があり、花卉の側面を描いたようである。(393)

D14:「宝カ」 何を書いたものか判然としない。3 本の爪のようなものを上にするか下にするかでも違ってみえる。上にすれば宝珠のように、下にすれば鼎のようだが定かではない。(394)

E: 生産地・生産者

E 1:「筒江」 佐賀県武雄市山内町にある窯場の筒江の名前を縦に書いた銘。現代では、陶磁

器の裏面にいわゆる窯印を記することで窯元やメーカーを示すことは一般的だが、18世紀の時点では窯場名を銘としたものは少ない。(035)

E 2 :「今泉平兵衛」 二重角枠内に今泉平兵衛の名が書き入れられている。高台内には他にF11「文化年製」もあるため、年代からして今泉家7代目の今泉平兵衛のことであろう。特殊な事例で一般的なものではない。(302B)

E 3 :「○○原樋口造」 呉須で書かれているが、無釉のために黒く発色している。上南川原の樋口窯跡は、幕末明治期の樋口太平の窯と知られることから付いた名前だと考えられている。頭はかすれているものの、おそらく「南川原」の「樋口」の窯の製品であることを示す銘である。(347)

E 4 :「亀山製」 現在の長崎県長崎市で1807(文化4)年に開窯したとされる亀山焼の銘を有田で写したもの。(363)

E 5 :「酒井田 柿」 酒井田柿右衛門家を示す銘。不定形枠に「酒井田」、角枠に「柿」を入れる。蓮華形の柄の背面に書き入れており、器形、銘の形態、配置、いずれも特殊な事例である。(373)

E 6 :「福一造」 生産者名を示したものだが、特定はできない。(375)

E 7 :「蔵春亭三保造」 有田の豪商久富家が使用した銘。「蔵春亭」は屋号で「三保」は久富与次兵衛昌保の号である。久富与次兵衛は1841(天保12)年に佐賀藩から海外輸出の独占販売権を得て、有田焼の海外輸出を再興させた。また、久富家の銘は特殊品だけではなく一般的な製品に広く使用されたため、有田におけるブランド銘のはしりでもある。(376、377 他)

E 8 :「大日本肥磯山信甫製」 久富家から独占販売権を譲与された田代紋左衛門は「肥磯山信甫」のブランド銘を使用した。「肥磯山」とは、肥前の皿山という意味で、E 6 はこの銘の頭に「大日本」を付けたもの。(384)

E 9 :「菊(梶原菊三郎)」 菊の字をデザイン化した銘は、黒牟田の窯焼きであった梶原菊三郎のものとされる。(385)

F : 和暦

F 2 :「延寶年製」 「延寶」とは日本の元号の一つであり1673～1681年に当たる。1800年前後に再使用された銘の一つと言える。(220、240 他)

F 7 :「寛延年製」 「寛延」とは日本の元号の一つであり1748～1751年に当たる。(041)

F 8 :「宝永年製泉利」 「宝永」とは日本の元号の一つであり1704～1711年に当たるが、この銘のある097は18世紀後半の作品である。「泉利」については、窯場と生産者名の略称と推定されている(鈴田 1995)。この他「宝永泉利」の十字配置銘もある(水町 1959 p133)。(097)

F 9 :「天明年製」 「天明」とは日本の元号の一つであり1781～1789年に当たる。二重角枠

内に2行で書かれており、和暦銘としては珍しい。同時期に多いA33「宣徳年製（二重角枠）」の影響か。（183、184）

F10：「寛政年製」「寛政」とは日本の元号の一つであり 1789～1801 年に当たる。（251、253）

F11：「文化年製」「文化」とは日本の元号の一つであり 1804～1818 年に当たる。（271）

F12：「文化年製（篆書体）」角枠内に篆書体で表された文化年製銘。酒井田柿右衛門家文書にある文化3（1806）年の御用注文帳には紀州様御用注文として砂物鉢の図が描かれているが、この底裏に記す「文化年製之印」として F12 と全く同じ図が添えられている（有田町史編集委員会 1985 p491）。この銘がある蓋物が御用注文品であったかは分からぬが、写実的な百合の文様で特徴的なデザインである。（326）

F13：「文化十三」特定の年代（文化13年＝1816年）を記した特殊な年号銘。（322）

F14：「文政年製」「文政」とは日本の元号の一つであり 1818～1830 年に当たる。（324）

F15：「天保年製」「天保」とは日本の元号の一つであり 1830～1844 年に当たる。皿の表に日本本地図や世界地図を書いたいわゆる地図皿の例が多く、「本朝天保年製」銘もみられる。（370）

G：その他

G 4：「丸に松」円枠に松の篆書体が書かれた銘。かつては佐賀県小城市の松香渓（松ヶ谷）焼を示すものと考えられてきたが、有田の樋口窯跡の出土陶片にこの銘があったことから、有田製のものであることが分かっている。（028、052 他）

G 5：「五良大甫呉祥瑞造」この銘は明末の日本向け中国磁器にみられ、これが書かれたものに類する中国磁器を「祥瑞」と呼称している。有田ではこれを 18 世紀後半になって写している。有田では「五」が「王」に、「祥」が「樽」のようになっていることがある。（065、254 他）

G 6：「藤」「藤」の字にみえるが、何を意味しているかは不明。明治には藤信介（伸介）のものとして「藤製」という銘があるようだが、関係は分からぬ。（111）

G 7：「恵泉館製」恵泉館がどこの何を意味するものは分からぬが、中国磁器に多い堂斎銘をまねたものだろう。樋口窯跡の出土陶片に例がある。（125）

G 8：「松甫」「松」と「甫」を縦に書いた銘だが、その意味するところは分からぬ。樋口窯跡の出土品に例がある。（166）

G 9：「五良太甫」二重角枠内に2行で書かれたもの。G 5 からの変化銘。（192）

G10：「呉祥瑞造」二重角枠内に2行で書かれたもの。G 5 からの変化銘。（257）

G11：「北京山製」北京といえば中国の首都だが、中国磁器にこの銘はみられない。中国風を意識して入れられたものか。319 とは別に館蔵品では柴澤コレクションに2例ある。

G12：「紫陽山」江戸時代に窯業地のことを「皿山」や「山」と呼称したが、「紫陽山」が何を

指したものかは分からぬ。(340)

3. 銘の消長と器種

(1) 各分類の特徴

柴田夫妻コレクションにみられる銘のうち18世紀後半から近代では、前の年代から出現したものと含め97種類の銘を確認した。対象期間が長いこともあるが、これまで最も種類が多い。この97種類の変遷を表1にまとめる。

概観すると、新しくE類(生産地・生産者)が増え、A、B、C、F、G類それぞれで種類が増加している。中でも目立つのは、清朝磁器に由来する年号銘の出現や断絶して再び使用された事例である。また、これまで突出してみられたB6(渦福)が急速に減少し、B18(示+米)やB24(示+×)といった別形態の福字銘が現れる。

A類からみていくと、安定してA3(大明成化年製)が多いほか、18世紀前半に続いて使用されるA17(大明年製)やA30(成化年製)もまとまった数の使用がみられる。特にA30は18世紀後半以降の方が使用例が多い。対して18世紀前半の主要な銘の一つであったA24(大明萬曆年製)は激減し、断絶と再使用というこの時期に特徴的な動向をみせる。もう一つの特徴である清朝系年号銘の出現では、年代的にも早い「雍正」銘が先に使用されるものの、その後の「乾隆」由来の銘の方が、圧倒的に多い。乾隆帝による60年にも及ぶ治世の影響だろうが、肥前磁器では同時代ではなく遅れて出現し、退位後の19世紀まで使用が続く。特にA37(乾)は、19世紀における代表的な銘の一つにもなる。

B類では、前述のとおりこれまで最も使用例の多かったB6(渦福)が減少し、19世紀にはみられなくなる。B6から派生したB19も19世紀にはない。18世紀後半以降のB類で最も多いのはB8(富貴長春)である。伊万里の陶器商人であった前川家の資料のうち、明和9(1772)年の日付を持つ注文帖には、「富貴長春之銘ハ無用」という注意書きがある。「富貴長春」を「銘」と認識していたことや、わざわざ書き入れるほど一般的に使用されていた銘であることがうかがえる。ただし、B8も19世紀では減少傾向である。

B類で特徴的なものが、B6以外の形態をした福字銘である。B1(福)は19世紀になって再使用されたもの。B18(示+米)は「富」の省略形で中国磁器に原形があるが、時代的には17世紀前半のものである。G5(五良大甫呉祥瑞造)などのように、古い時代の中国の磁器に倣って書き入れた銘の事例だと考えられる。B24(示+×)は18世紀末になって突然現れ、19世紀におけるB類の代表銘となる。これらの銘を合わせるとB8より使用例が多くなる。形態は違えど、やはり福の字がB類における銘の主流であったのだろう。

C類に分類されるような変形字や合字が、17世紀後半から18世紀前半までに比べて増え、

表1 柴田夫妻コレクションにみられる銘の消長（18世紀後半から近代）

分類	1740	1800	1860	明治	大正	銘	件数
A3						大明成化年製	42
A4						明	1
A6						大明嘉靖年製	1
A8						大明成化年造	1
A10						宣德年製	2
A17						大明年製	16
A24						大明萬曆年製	3
A30						成化年製	23
A31						大清雍正年製	1
A32						隆	6
A33						宣德年製（二重角枠）	7
A34						大清乾隆年製	4
A35						清	5
A36						嘉製年製	1
A37						乾隆年製	3
A38						乾	21
A39						大清年製	1
A40						大明年造	1
A41						永樂年製	1
A42						大清乾隆	2
B1						福（篆書）	5
B2						福（草書）	1
B4						寿	1
B6						福（渦）	19
B8						富貴長春	38
B9						奇玉宝鼎之珍	5
B15						長命富貴	1
B18						福（米）	15
B19						福（山渦）	9
B20						富	1
B21						大明富貴長春	1
B22						羊友珍玩	1
B23						竹友珍玩	1
B24						福（×）	24
B25						永樂寶製	1
B26						長生未央（瓦当文様）	1
B27						元	1
B28						玩	6
C1						示 + 朱	2
C60						不明字 46（富貴佳器カ）	2
C62						不明字 48	1
C63						不明字 49	1
C64						不明字 50（春一）	15
C65						不明字 51（壽カ）	10
C66						不明字 52	1
C67						青カ	11
C68						不明字 53	1
C69						不明字 54	1
C70						不明字 55（梶カ）	1
C71						不明字 56	1
C72						不明字 57	1
C73						梶カ	3
C74						不明字 58	1
C75						不明字 59	1
C76						不明字 60	1
C77						不明字 61（福カ）	1
C78						山に土カ	1
C79						祿カ	1
C80						吉カ	1
C81						不明字 62（和 or 利カ）	3
C82						不明字 63	1
C83						不明字 64	1
C84						不明字 65（岩カ）	3
C85						火 + 木カ	1

分類	1740	1800	1860	明治	大正	銘	件数
D10						マーク(虫)	8
D11						マーク(宝)	2
D12						マーク(盤長)	2
D13						マーク(半菊)	1
D14						マーク(宝珠カ)	1
E1						筒江	1
E2						今泉平兵衛	1
E3						○○原権口造	1
E4						亀山製	1
E5						酒井田 柿	1
E6						福一造	1
E7						藏春亭三保造	5
E8						大日本肥碟山信甫製	1
E9						菊(梶原菊三郎)	1
F2						延寶年製	4
F7						寛延年製	1
F8						宝永年製泉利	1
F9						天明年製	2
F10						寛政年製	2
F11						文化年製	3
F12						文化年製(篆書体)	1
F13						文化十三	1
F14						文政年製	2
F15						天保年製	1
G4						丸に松	5
G5						五良大甫吳祥瑞造	5
G6						藤	1
G7						恵泉館製	1
G8						松甫	1
G9						五良太甫	1
G10						吳祥瑞造	1
G11						北京山製	1
G12						紫陽山	1

17世紀前半頃のようである。実際、17世紀の中で一旦使用されなくなったC1(示+朱)が再使用されている。角枠を伴う印章形の銘が多い点や、1文字分の篆書体で表す銘が多い点が特徴といえる。1件だけの例がほとんどだが、C64やC65(壽カ)、C67(青カ)は10件以上あり、C類におけるこの時代の代表的な銘と言える。C81(和or利カ)やC85(火+木)は、柴田夫妻コレクションにおける数量は少ないものの、19世紀の作例に使用される銘として目につく。

D類は18世紀前半からみられるものだが、後半以降は種類も数量も減少する。その中でもよくみられるものが虫のようなマークのD10である。この銘には、清朝磁器に元となったと考えられる銘がみられる(扇浦・大橋 2020a、2020b)。D11(宝)のようなマークが崩れて虫のようになったもので、清朝磁器では宝と虫風の銘が同時期に使われている。清朝磁器には他にも草花や双魚などの銘もあるが同時期の肥前磁器にはないため、すべてを写しているわけではなく選択的に採用したものと考えられる。

18世紀後半から幕末近代における大きな特徴は、E類とした生産地・生産者を示した銘が現れることである。柴田夫妻コレクションでは1740～1770年代のE1(筒江)が最も早い。現佐賀県有田町に隣接する武雄市山内町にあった窯場で、有田皿山とは別に磁器を生産しており、差別化もあって使用したのだろうか。筒江銘は産地を示す銘として早い事例だが、実はG4と

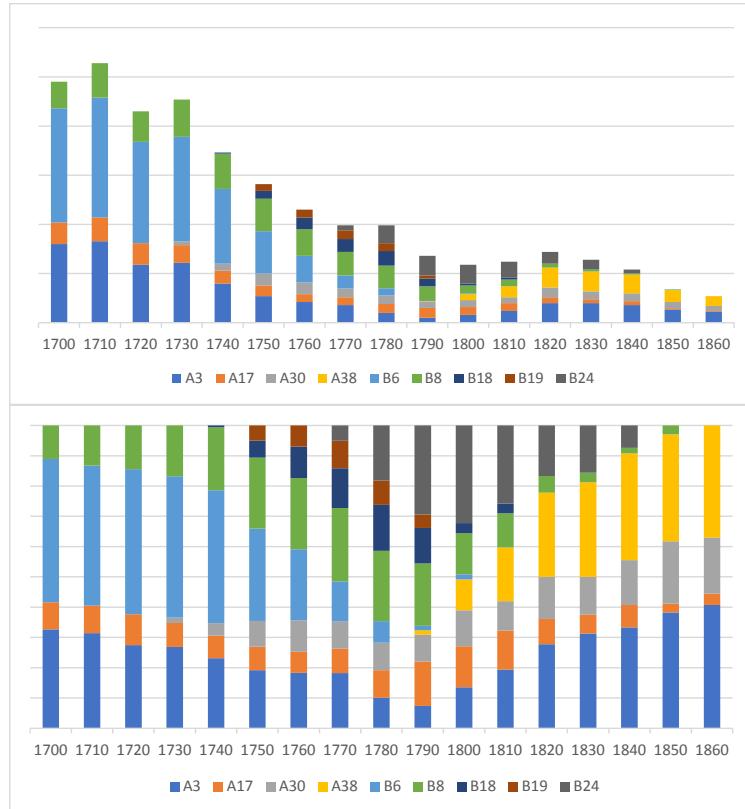
した円柱に松の篆書体銘は、別に角柱の銘もあり、この角柱の松銘に関しては松香渓焼の可能性が高い（徳永 2023）。そうだとすれば、皿山が置かれたという享保 10（1725）年からの使用は不明にしても、産地を示した銘として時期的にかなり早い事例となる。また、18世紀以降は有田周辺以外でも磁器を生産するようになるが、1714（正徳 4）年に開窯したとされる筑後の朝妻焼は「朝」銘を伴っており、これも産地を示した早い事例である。18世紀末から19世紀には京都や瀬戸などの九州以外でも磁器窯が増え、産地を示す銘も各地で使用されていく。対して有田では、E 2（今泉平兵衛）や E 5（酒井田 柿）など、窯元を示す例はあっても産地を主張する銘はなかった。メーカーなどを表すブランド銘としては E 5（蔵春亭三保造）に始まり、「肥碟山信甫（造・製）」、「蘭マーク（=香蘭社）」、「富士流水マーク（=深川製磁）」など19世紀後半には各窯元や商社で使用が増えていく。「肥碟山信甫」銘以降、「肥碟山平林」や「肥碟山深江」など、有田皿山の別称として「肥碟山」をつけた銘が多数登場する（九陶 2006、鈴田 2022）。奉納品などの特殊な事例を除いて、有田が産地を示すようになった初期の事例と言える。

18世紀後半以降の主要な銘として A 3（大明成化年製）、A17（大明年製）、A30（成化年製）、A37（乾）、B 6（渦福）、B 8（富貴長春）、B18（示+米）、B19（山に渦）、B24（示+×）を挙げ、1700年代以降の量的変化をグラフ 1 にまとめた。上は数量差を示し、下は 100% 積み上げ棒グラフにしている。B 6 の使用が 18世紀末で終わり、反対に A37 が 19世紀以降増加していくことがよく分かる。A 3 も 18世紀末では減少傾向だが、19世紀以降は増加に転じている。B 類の中では B 6 が減少傾向となる 18世紀後半に別形態の福字銘（B18、24）が登場するも、1800年代前後をピークとして減少していく。19世紀では A 類が大半を占める。

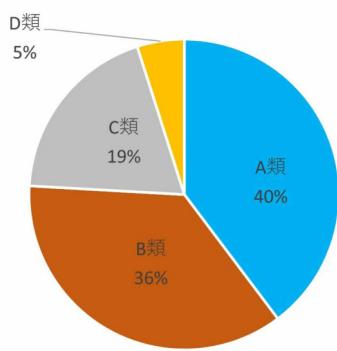
（2）器種との関係

皿類、鉢類、碗類の3種類の器種と A～D 類の傾向をみていくが、全体の傾向を反映している皿類と鉢類、碗類いずれも似たような割合を示している。全体として 18世紀前半までと比べると、B 類が数を減らした分 A 類の割合が増えた。皿類、碗類については大きな差ではないものの A 類が最も多い。鉢類では、18世紀前半の主流銘の一つであり鉢類への使用も多かった A24（大明萬曆年製）が激減した影響か、B 類の方が多い。他の器種と比べて C 類の割合が低いことも影響しているだろう。

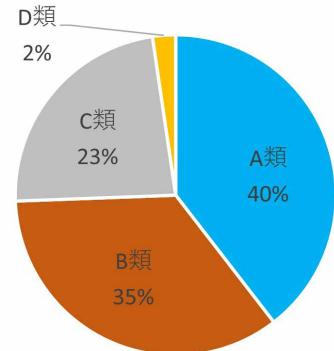
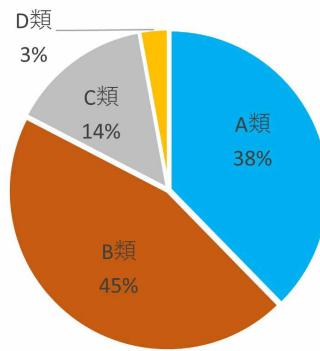
鉢類と碗類ではみられる C 類にも多少の違いがあり、鉢類では C64（春一）、C65（壽カ）が多いのに対し、碗類ではこれらではなく、C67（青カ）が多い。B 類をみると鉢類には各種の福字銘があるが、碗類には B24 が 1 例だけでは B 8 が占めている。鉢類に B 類が多いのは、福字銘の種類が多く、かつ各種まとった数があるからだろう。しかしそれも、福字銘が減少す



グラフ1 1700～1860年代における主要銘の量的変化



グラフ2 皿類における銘の分類



グラフ3 鉢類における銘の分類

る19世紀以降は、ほぼA類が占めるようになる。

皿類の中で大皿ではA3が多く、B類は福字銘以外なくD類のマーク銘はみられない。小皿、手塙皿では逆にA3のような長い文字銘は少なく、D類が少量入る。特に小皿ではA30(成化年製)が目立って多く、しかもいずれも輪花皿か変形皿である。そもそも変化のない丸小皿自体が少ないとはいえ、特徴的な部分といえる。A30全体をみると変化のない器形のものがないわけではないので、今後の事例の積み重ねが必要である。

また、19世紀以降の特徴として高台内の中心を外して端に銘を書き入れることがある。全てがそうなっていくわけではないが、皿類によくみられ、鉢や碗にはない。

4.まとめ

柴田夫妻コレクションを対象に18世紀後半から近代の銘の集成、分類を行った。対象範囲の資料数として1048件の作品があり、このうち397件に97種類の銘が確認できた。大きな特徴は、今まで銘の主流であった福字銘が減少し、19世紀以降は年号銘の方が主流となっていくこと。その中でも清朝磁器の年号銘が出現し、多くなっていくこと。古い時代の明朝磁器にある銘を含め、年代的に断絶期間があった後に再使用される銘があること。この再使用された銘については抽出して表2にまとめた。

表2 断絶期間において再使用された銘

分類	1740				1800				1860	銘
A4										明
A6										大明嘉靖年製
A8										大明成化年造
A10										宣徳年製
A24										大明萬曆年製
B1										福（篆書）
B15										長命富貴
C1										示+朱
F2										延寶年製
A39										大明年造
B18										福（米）
G5										五良大甫吳祥瑞造

表2のうち、下3例については古い明朝磁器にある銘を使用したものである。18世紀後半になってB18、G5といった明朝磁器銘を使用し、その後、1780年代以降にF2に代表されるような、A8やA10などの17世紀の肥前磁器にみられる銘を再使用するものが出てくる。A6のように18世紀前半に使用されていた銘が中葉頃に一時断絶し、18世紀末に再使用されるものもある。このような銘について、国内に遺存していた古い製品を模した可能性が指摘されている（村上 1999）。

本稿までで、柴田夫妻コレクションにみる肥前磁器銘は全て紹介した。柴田夫妻コレクションに一連の中国磁器などの銘については、稿を改めて紹介したい。柴田夫妻コレクションの銘を整理する中で、中国磁器の多大な影響を改めて感じた。清朝磁器は明朝磁器銘を模倣する場合もあるため、特に明朝磁器銘の影響は大きい。明朝磁器、清朝磁器、肥前磁器のそれぞれの関係を整理する必要がある。引き続き肥前磁器銘の集成と分類を行いながら、今後は中国磁器銘の整理も進めたい。

引用・参考文献

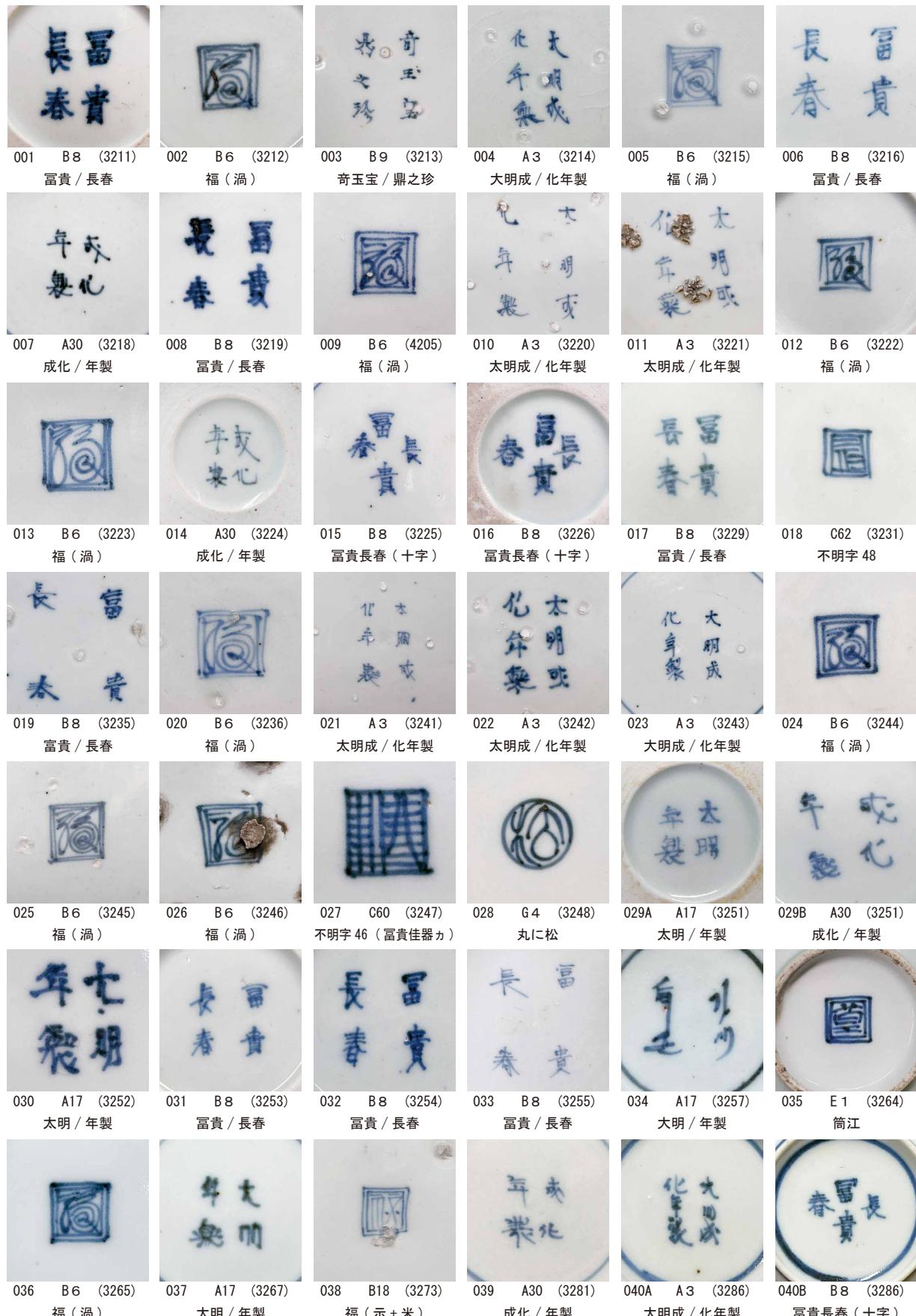
- 有田町史編集委員会 1985『有田町史 陶業編 I』有田町
 有田町史編集委員会 1988『有田町史 古窯編』有田町
 扇浦正義・大橋康二 2020a「唐人屋敷跡出土の清朝磁器中心の変遷」『第9回近世陶磁研究会 江戸時代に

- おける年代の判る罹災資料』p. 29 ~ 90 近世陶磁研究会
- 扇浦正義・大橋康二 2020b 「清朝磁器の文様と銘の変遷」『第9回近世陶磁研究会 江戸時代における年代の判る罹災資料』p. 91 ~ 116 近世陶磁研究会
- 大橋康二 1988a 「17世紀後半における肥前磁器の銘款について」『東洋陶磁』第17号 pp. 25 ~ 37 東洋陶磁学会
- 大橋康二 1988b 「18世紀における肥前磁器の銘款について」『青山考古』第6号 p. 67 ~ 74 青山考古学会
- 大橋康二 1991 「肥前磁器の変遷 - 文様を中心として - 」『寄贈記念柴田コレクションII』pp. 87 ~ 95 佐賀県立九州陶磁文化館
- 大橋康二 2001 「肥前・有田磁器にみる紀年銘について」『国立歴史民俗博物館研究報告』第89集下巻 pp. 685 ~ 714 国立歴史民俗博物館
- 大橋康二 2022 「アリアナ美術館所蔵の「カ」銘の有田色絵磁器」『海外で《日本》を展示すること』 pp. 221 ~ 226 大学共同利用機関法人 人間文化研究機構 国立歴史民俗博物館
- 耿寶昌 1984 『明清瓷器鑒定 清代部分』學苑文化事業出版
- 斎藤菊太郎 1972 『古染付 祥瑞 陶磁大系』44 平凡社
- 佐賀県立九州陶磁文化館 2006 『近現代肥前陶磁銘款集』
- 佐賀県立九州陶磁文化館 2012 『古伊万里の文様集成』
- 佐賀県立九州陶磁文化館 2019 『柴田夫妻コレクション総目録（増補改訂）』
- 鈴田由紀夫 1995 「17世紀末から19世紀中葉の銘款と見込み文様」『柴田コレクション展（IV）』p. 272 ~ 279 佐賀県立九州陶磁文化館
- 鈴田由紀夫 2022 「19世紀後半における有田と三川内の輸出品に関する研究—薄手磁器を中心として—」『佐賀県立九州陶磁文化館 研究紀要』第7号 pp. 38 ~ 67 佐賀県立九州陶磁文化館
- 朱裕平 2018 『中国瓷器銘文』上海科学技術出版社
- 徳永貞紹 2023 「肥前小城松香渓焼の基礎的研究」『佐賀県立九州陶磁文化館 研究紀要』第8号 pp. 31 ~ 60 佐賀県立九州陶磁文化館
- 富永樹之 1998 「出土品にみる景德鎮青花の底裏銘」『青山考古』第15号 pp. 35 ~ 65 青山考古学会
- 陶器全集刊行会 1937 『日本古陶銘款集 九州篇』平安堂書店
- 中島浩気 1955 『肥前陶磁史』肥前陶磁史刊行会
- 前山博 1984 「近世、伊万里焼の流通—記録から探る—」『北海道から沖縄まで 国内出土の肥前陶磁』 pp. 142 ~ 151 佐賀県立九州陶磁文化館
- 水町和三郎 1944 『伊万里染付大皿の研究』桑名文星堂
- 水町和三郎 1959 「古伊万里の製品」『古伊万里』pp. 89 ~ 146 金華堂
- 宮木貴史 2020 「柴澤コレクションにみる肥前磁器の銘款について」『開館40周年記念・寄贈記念 特別企画展 柴澤コレクション』pp. 117 ~ 130 佐賀県立九州陶磁文化館
- 宮木貴史 2021 「柴田夫妻コレクションにみる銘款集成1」『佐賀県立九州陶磁文化館 研究紀要』第6号 pp. 30 ~ 51 佐賀県立九州陶磁文化館
- 宮木貴史 2022 「柴田夫妻コレクションにみる銘款集成2」『佐賀県立九州陶磁文化館 研究紀要』第7号 pp. 68 ~ 85 佐賀県立九州陶磁文化館
- 宮木貴史 2023 「柴田夫妻コレクションにみる銘款集成3」『佐賀県立九州陶磁文化館 研究紀要』第8号 pp. 68 ~ 85 佐賀県立九州陶磁文化館
- 村上伸之 1999 「肥前における明・清磁器の影響」『貿易陶磁研究』第19号 p. 65 ~ 84 日本貿易陶磁研究会

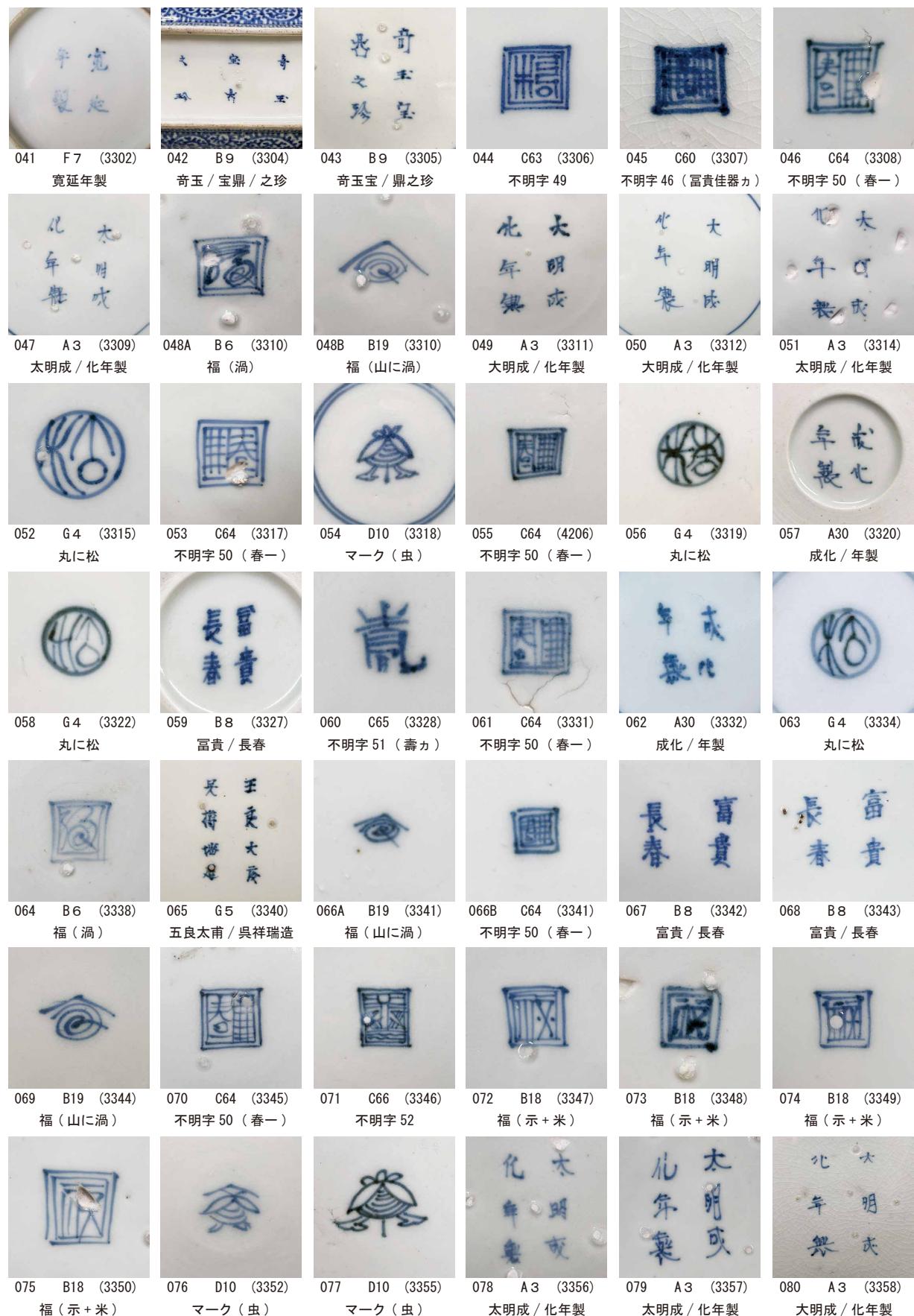
1740 ~ 1780 年代

柴田夫妻コレクション肥前陶磁器銘一覧④

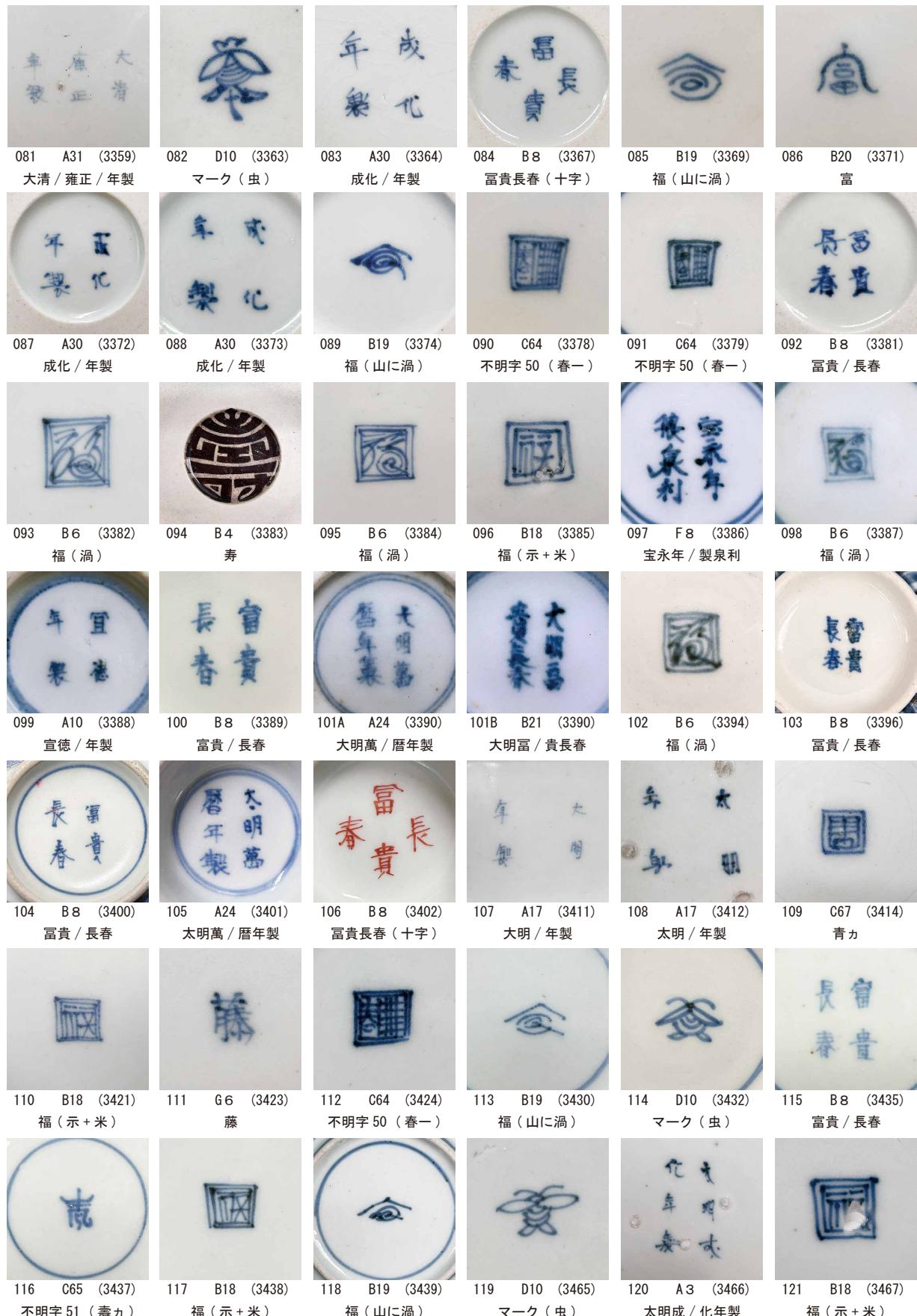
※ () 内は『柴田夫妻コレクション総目録 (増補改訂)』の目録番号



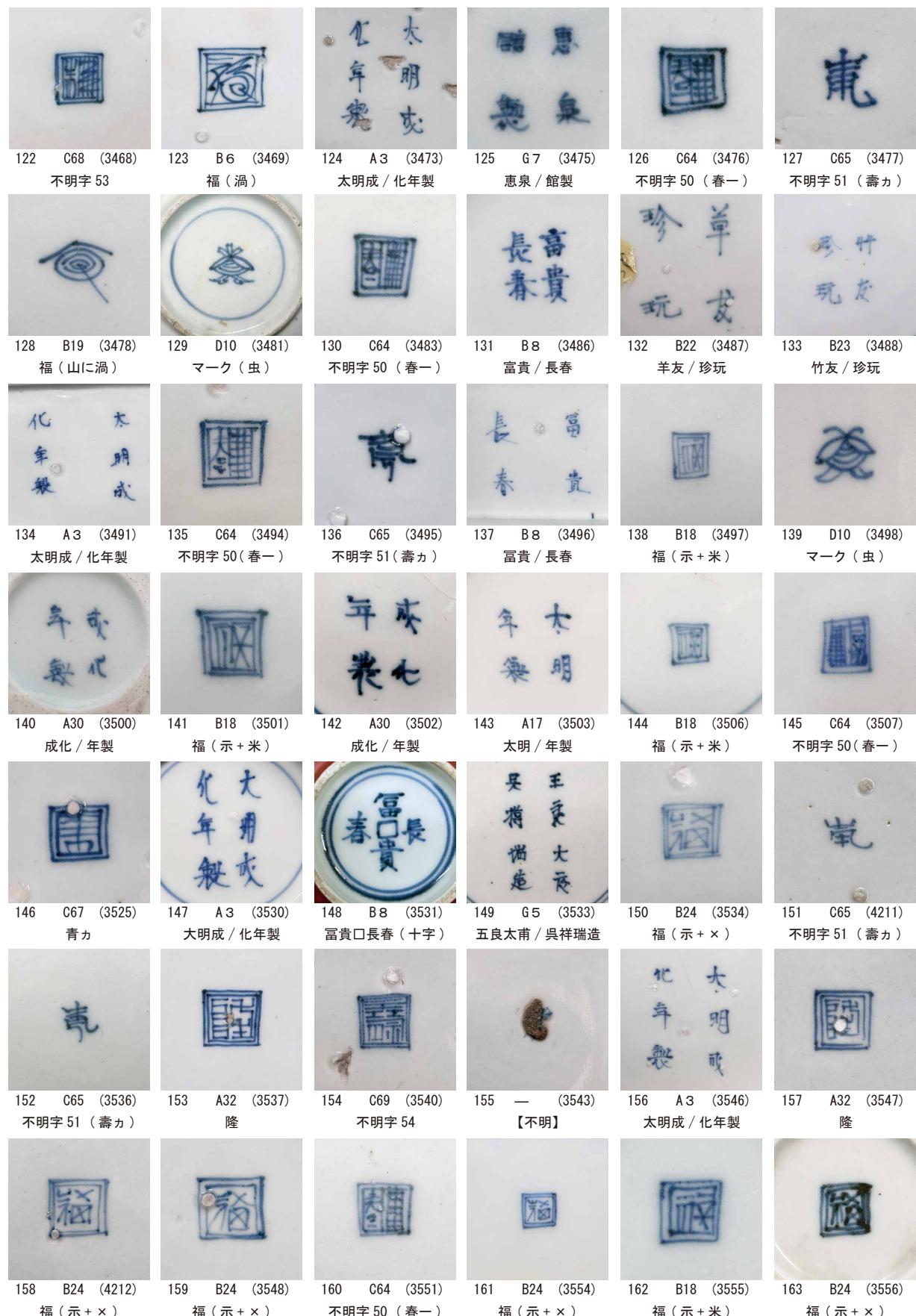
1740 ~ 1780 年代



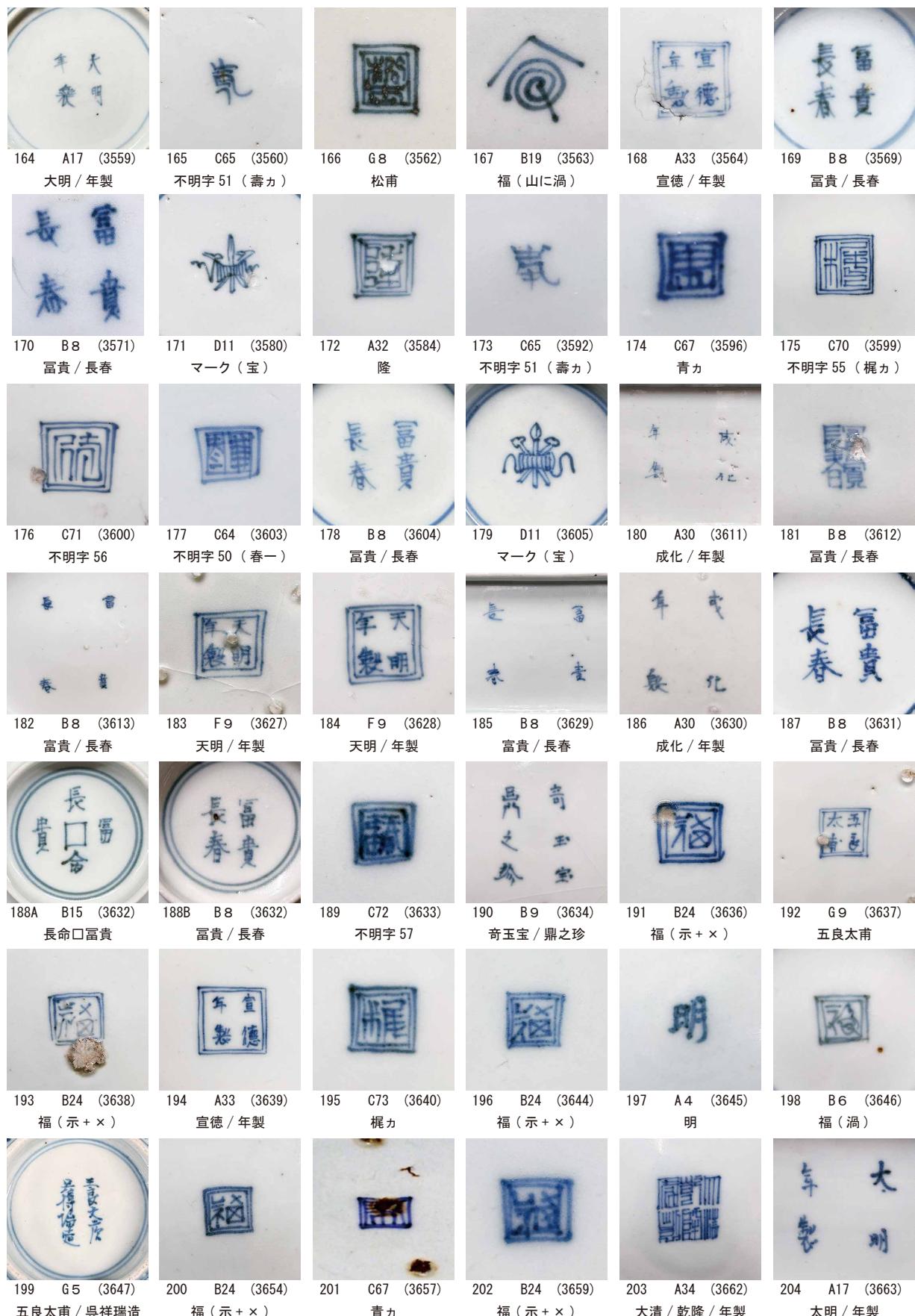
1750 ~ 1780 年代



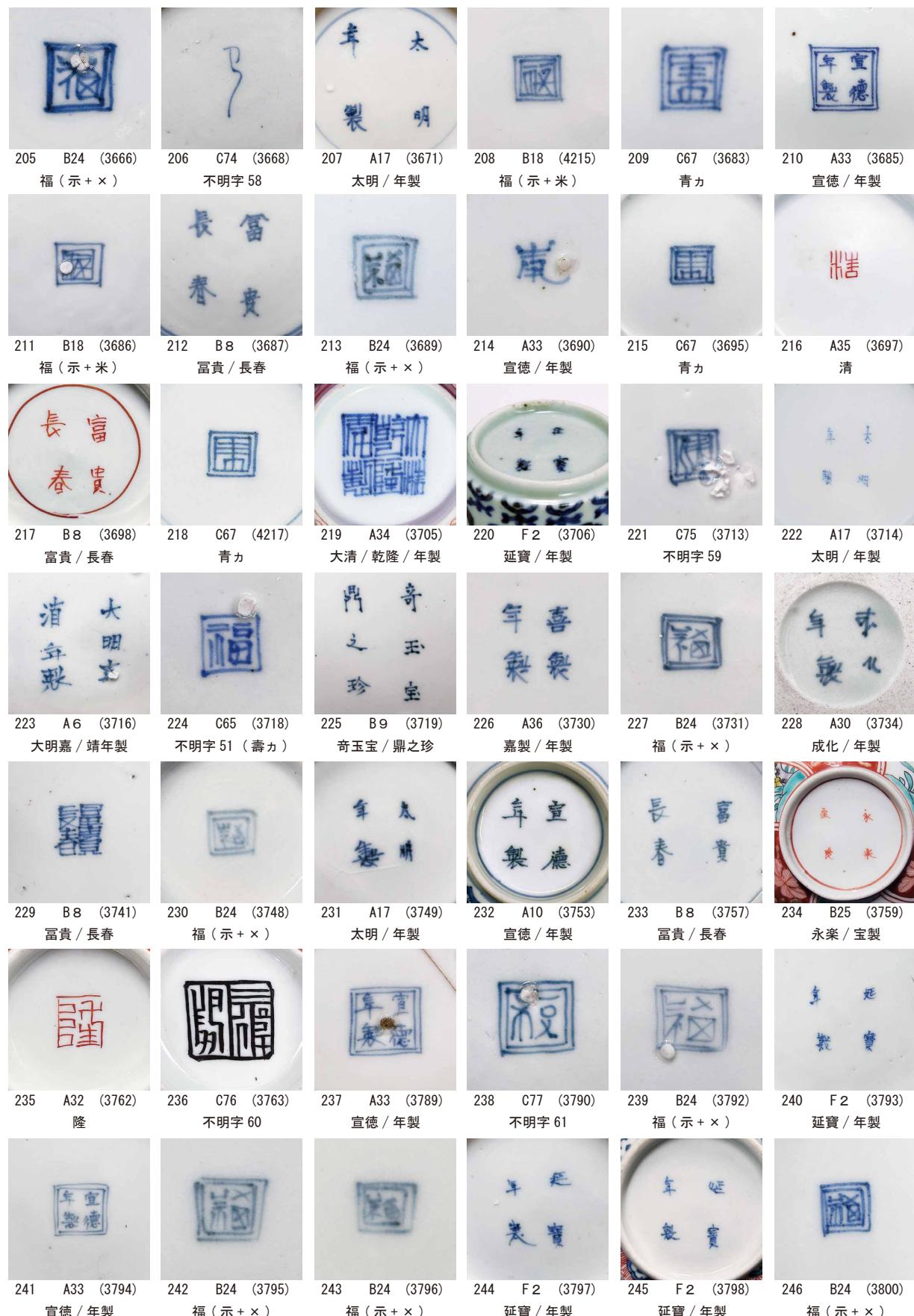
1760～1790年代



1770 ~ 1810 年代



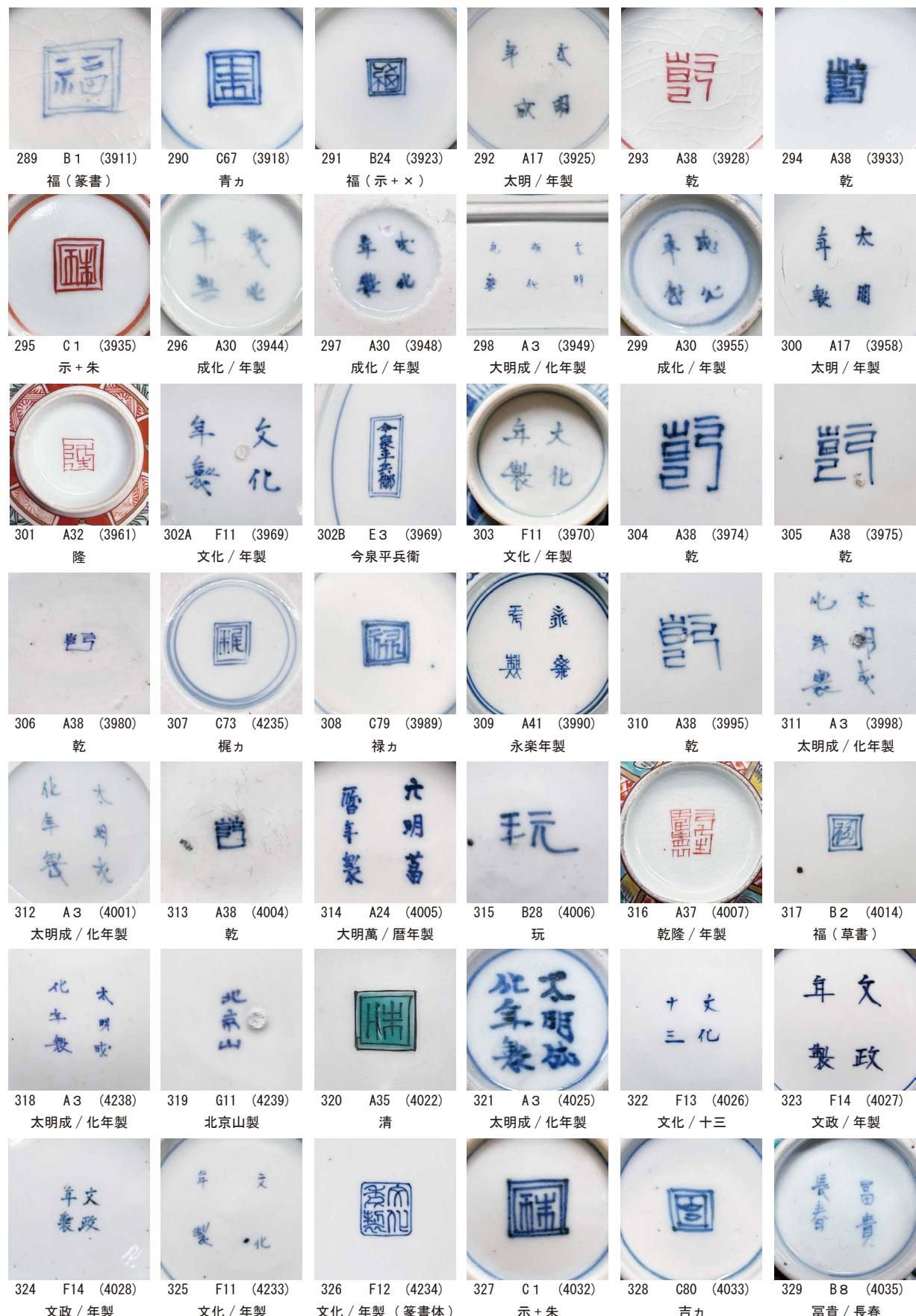
1780～1830年代



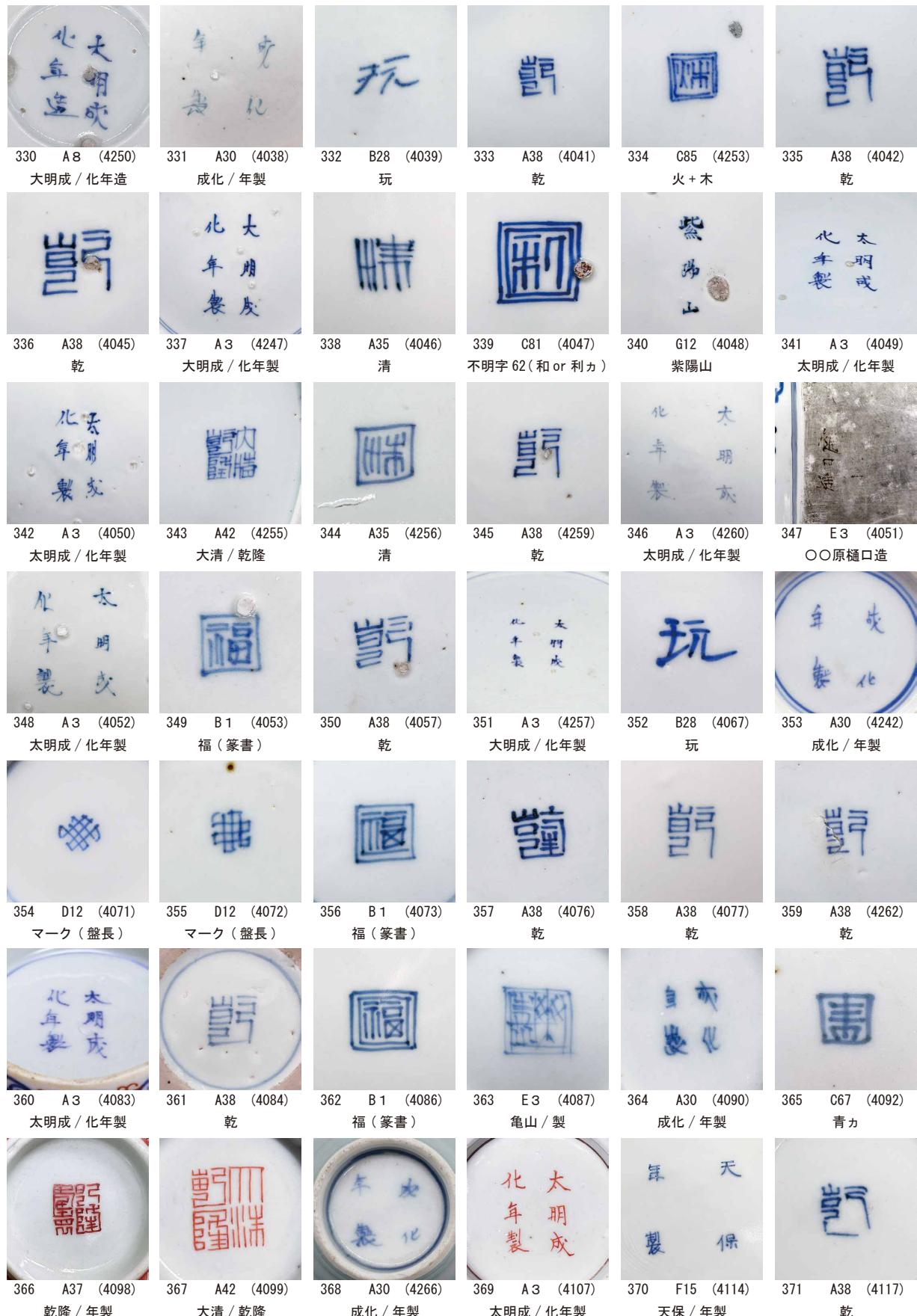
1780 ~ 1840 年代



1800 ~ 1850 年代



1820 ~ 1860 年代



1830年代～近代

